

昭和二十年十一月二十四日 第三種郵便物認可
昭和二十年三月一日發行 毎月一回一日發行

第六百號

一 統

第五十五年三月念號

知法思國

抑も人の世に在る誰か後世を思はざらん。佛の出世は専ら衆生を救はん爲なり。

爰に日蓮比丘と成りしより旁法門を開き已に諸佛の本意を覺り、早く出離(解脱)の大道を得たり。其の要は妙法蓮華經是なり。(佛)乘の崇重、三國の繁昌儀眼前に流る、誰か疑網を貽さん哉。而るに(世人)専ら正路に背きて偏に邪途を行す。然る間聖人、國を捨て、善神職を成し、七難並に起つて四海閉かならず。方今の世、悉く關東に歸し、人皆土風を貴ぶ。就中日蓮生を此の土に得て、豈に吾國を思はざらん哉。仍て立正安國論を造りて故最明寺入道殿(時頼)の御時、宿願入道を以て見參に入れ畢んぬ。

而るに近年の間多日の程、大我浪を亂し夷敵國を伺ふ。先年勘へ申す所、近日符合せしむる者なり。……夫れ末廟を知る者は六正の聖臣なり、法華を弘むる者は諸佛の使者なり。而るに日蓮悉くも鸞傲鶴林(法華經涅槃經)の文を開いて翔王鳥惡(諸佛)の志を覺り、剩さへ將來を勘へたるに相符合することを得たり。先哲に及ばずと雖も、定んで後人には希なるべき者なり。

法を知り國を思ふの志、尤も貴せらるべきの處、邪法邪教の輩、論議譏言するの間、久しく大忠を懷いて而も未だ微望を達せず。剩へ不快の見參に罷入ること、偏に難治の次第を愁ふる者也。

伏して惟れば泰山に昇らずんば天の高きを知らず、深谷に入らずんば地の厚きを知らず。仍て御存知の爲に立正安國論一巻之を進呈す。勘へ載する所の文、九牛の一毛也。未だ微志を盡さざるのみ。……早く賢慮を回らして須らく異敵を退くべし。

世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す。是れ偏に身の爲に之を述べず。君の爲、佛の爲、神の爲、一切衆生の爲に言上せしむる所なり。

一日蓮

人は先づ正意誠心なれよ。正意誠心ならんと欲せば、天地宇宙 對して敬虔の情操を養ひ、進んで宗教的信念に住せよ。宗教の信念に於ては、深く迷信を警め固陋を排し、正信正解を獲得せよ。一たび正しき信解を得ば、法悦歡喜の心油然として湧き、真正なる幸福を享受し、正義の力躍然として發動し、道義的感情に促されて、必ず善徳を行ふに至らん。此に於て乎元氣充實し能率増進し、事業を成就し目的を達成すべし。而して信念と道念とは、愈其人格を大にし天下復畏るべき者無きに至らん。佛教に於ては、信念より菩薩行に入り、遊行畏れなきこと師子王の如くならんと説き、儒教に於ては、誠は天の道、誠を思ふは人の道、至誠にして動ぜざる者は古より未だ曾て之れ有らざるなりと言へり。人若し此信解行願に立つを得ば、文化の創造に對しては、物質偏傾の病弊を看破し、理想的文化の何たるかを會得し、中正穩健の行動を取るに至り、東洋文化の特色を讚美して之を奉行し、西洋文化の長短を批判して其取捨を誤ること無く。又國家存立の意義を領得し、國家は内國民の幸福を保證し徳性を發育し、外世界の文化に寄與し人類の發達を擁護す。個人主義博愛主義の有する長所も、亦國家の理想的活動に由つて完成せらるる所以を知得し、進んで我國體の尊嚴を敬慕し、皇室の聖徳を光揚し、忠愛の觀念を増大し、社會共存の誼を尊び、家族親和の實を重んずるに至らん。天地の人としては、敬虔の心に住して其獨を慎み、見えざるを恐懼し聞えざるを戒慎し。家庭の人としては父母に孝に兄弟に友に、夫婦相和し。社會の人としては恭儉己を持ち博愛衆に及ぼし、知能を啓發し徳器を成就し、公益を廣め世務を開き。國家の人としては克く忠に、一旦緩急あれば義勇公に報じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼し。世界の人としては東西相倚り彼此相濟し、以て文明の惠澤を共にし、斯くて一身一家より社會國家世界天地を貫いて、完全なる人と成るを得べし。而も此等の美徳は守り易く行ひ易し。心だに誠あらば何事も成るものぞかしの聖訓、凜乎として我等の行路を照せり。而して正意誠心は、天地宇宙に對する敬虔の情操、宗教的信念に由つて養成せらるべきなり。大いなる哉人、喜ばしい哉人。我れ今幸に人とし生まる、何ぞ生涯空しく過ごすべけんや、何ぞ千歳に悔を貽すべけんや。

近代の教傑本多日生上人

長谷川義一

一、顯本法華宗と生師

明治・大正・昭和の聖代に互る宗團としての顯本法華宗の活動は、本多日生上人其人の動き其物であつた。生師等の主唱に依て從來の日蓮宗妙滿寺派の派名を廢し、顯本法華宗と、明治三十一年十一月十四日、宗名公認ありて曰來、生師を中心に各地に布教は活潑に展開し、顯本の本多師か、本多師の顯本かと稱され、他門には本多宗と迄呼ばれもした。

或時は、大谷光瑞師と並稱比較され、眞に什門近代の教傑であつた。そこには、生師に共鳴せる幾多の諸師の法功にも感謝さる。特に本山妙滿寺第二百五十五世正心院板垣日暎大僧正は、生師の主張に共鳴し、豪腹なる臆師は、生師に絶大なる支援を惜まなかつた事を忘れてはならない。され、生師は眞に偉大な存在であつた。國社會議裁田中智學先生が、磯部滿事氏謹撰「本多日生上人」に題して「什師の再生現代の良師」と宛に所以ある哉。

二、生師の経歴

生師字は聖應、後に聖應を以て院號とす。妙滿寺第二百五十九世、同二百六十一世なり。慶應三年三月十三日、播州姫路藩士國友堅次郎氏の二男として生る。幼名を長次と呼ぶ。

佛縁憑して菩提寺妙善寺第二十一世了妙院本多日鏡上人の養子となり、明治十二年八月十五日、勝幸妙立寺第二十一世本致院池田日昌上人に就て得度し、聖應と號す。時に十三。翌年師の遷化に遇ひ、爾來備前の學匠見玉日啓上人に隨身して宗學を研鑽し、同時に原泉學舎に碩學西毅一先生に就て漢學を學ぶ。同十九年上京して哲學館(後の東洋大學)に學ぶ。

志望遠大なる生師は、當時宗門の積弊不振を慨嘆して、同志を得、時の管長板垣日暎上人の同意を得、宗制原案起草委員となる。時に明治二十二年一月二十一日、師二十三。遂に宗門制度の大改革は斷行せられた。

同二十三年十一月、教務部長に任命され、縦横に教育に布教に其の巨腕を振ふ。然し本尊を肅正し、雜亂勸請を撤廢し、僧風を刷新して生命ある宗團を創設せんとするには、當時餘りにも積習ありて、宗門は混亂し、板垣管長は辭任し、續く坂本日相管長も辭され、綿織日統管長となるや、生師に對する怨恨は、同二十五年一月、突然剝離處分となる。

宗門より排斥せられたる生師は、正義貫徹の爲に、神田猿樂町に同志と共に顯本法華宗義弘通所を開き、次で淺草蔵前に、後に同新福井町に移り、同年十二月には、顯本法華宗第一宗義布教所が建設され、同二十六年二月には岡山市山下町にも第二宗義布教所が、同年十一月には津山に第三布教所が、同二十七年には神戸市福通二丁目第四布教所が開設され、東奔西走して宗義の宣明に盡す。

處が、各宗協會の各宗綱要編纂の問題から、生師を宗門に復せ

の隆起り、同二十八年四月僧籍に復し、小林日至上人と共に妙滿寺派綱要を編したが、編輯長島地獄僧師は、該綱要中、四箇格言と誹法嚴戒の二章を削除せんとして、此處に所謂四箇格言問題訴訟事件が起つた。同二十九年十二月十三日には、江東井生村樓に統一團團結宣言大會を開催して、妙宗統一團を設立し、同三十年一月より統一團報を發行し、各地に言論に文筆に大に四箇格言問題に廣長舌を振つた。かくして是の問題も、同三十一年七月各宗協會解散と共に龍頭蛇尾となる。生師幾多の法戦中で最も有名なものが、是の四箇格言問題である。

さて生師は、堺妙滿寺、姫路妙善寺、東京淺草盛泰寺、同吉野町圓乘寺、同新谷町慶印寺を経て、明治三十年五月に品川妙國寺第五十八世を嗣ぎ、同三十一年十一月には、顯本法華宗宗名公稱認可せられ、其間、大學林長、監督布教師、財務部長、法務部長、宗務總監の要職を経て、板垣再職管長退職後、管長事務取扱となり、明治三十五年五月大僧正となる。管長藤原日遊上人の時、宗門再び紛糾して再慶管長事務取扱となり、同三十八年五月、管長に當選、時に師三十九。爾來大正十五年五月迄、改選七回、二十一年間管長として本宗を統理した。

明治三十五年一月二十八日には、生師率先して門下各教團有志を井生村樓に會合し、四月二十八日、上野竹の臺に開宗六百五十年記念大會、續いて二十九、三十の兩日、神田錦輝館に宗徒大會を開催し、宗門統合期成同盟會の組織あるは、師の力又大であつた。

同三十九年七月には、興學布教の爲に、妙滿寺教學財團を設立

し、同四十二年一月には天晴會、同四十三年夏には講妙會、同四十四年六月には、婦人の爲に地明會を創す。日蓮主義勃興に天晴會は大きな役割を持つてゐる。同四十五年四月には、淺草清島町に帝都布教道場として統一團を建設した。

大正四年六月二十日の門下七教團統合成立は生師が主唱である。同七年三月には勞働問題撲滅し、勞務者善導の爲に自慶會を組織す。

大正十一年十月十三日、大聖人へ立正大師の諡號宣下は、又生師の努力に依る。而して宗内には記念事業として立正結社を組織した。

管長退職後、昭和三年七月には各派有志聯合協力し、思想善導の目的を以て知法思國會を創し、機關雜誌「教」を發行す。同十月、今上陛下御即位の大典に當り、多年社會教育に盡瘁の功に依り、十一月十日、天璽下賜、又文部省よりは表彰狀及桐花御紋章を御入箱が添られた。

かく生師は、法國の爲に大都市を中心として各地に日夜奔走、眞に席の暖まる暇なく、講壇實に一萬餘座、而も著述は其身に及ぶ。言論文筆の雄、四十餘年率先挺身せる什師再生の生師。安祥として昭和六年三月十六日寂、世壽六十五。宗門は師多年の法勳を旌表し、同五月十六日、妙國寺に於て宗葬の禮を以て弔ゆ。

三、生師の法勳

生師の法勳は、其の經歷に明かだが、其の宗葬に當り、田中智

學先生弔詞を述ぶ。而して生師の千古に輝く法勳三を擧ぐ。曰く「惟ふに、上人一代を通じて、弘法施設の功績枚擧に遑あらずと雖も、殊に不誼の千古に輝くもの三あり。

初め上人野に在り宗風の醇正を倡へて阻せず、偶々格言問題の起るに會し、當局の賢明、克く私情を捐て、上人を起用す、聖龍一たび雲雨を得て天に昇化するや、法雨沛然として華土を治す、幾くもなく推されて管長となり、一宗を統理するに及び斷然として勸請の雜亂を排し、信行の妄謂を糺す、天下風を聞て肅然たり、洵に千古の英斷と謂ふべし、是れ光輝ある法勳の一なり。又上人夙に本化門下各派分裂の現状を憐し、統合歸一の途を拓かんとして、循々勸説して一たび統合の同盟を策す、然れども因習の固く久しき、理融して情融するに至らず、惜いかな半途にして進展を阻し、雄圖空しく一夢に歸したれども、大義既に端を啓く、後世その圓熟を見んこと必せり、他日偏し統合融歸の春を迎へん時、天下復た上人播種の功を仰ぐに至るべきを疑はず、是れ法勳の第二なり。又上人恒に法國の冥合を念とし、國家をして一たび公的承認の下に、本化大聖の教功を刻する所あらしめむとして、大師號勸諭欽奏の議を起し、朝野の名士と語り各派の管長を促して、之を 闕下に伏奏し、遂に立正大師號の勳諡を拜するに至る、實に是れ法國冥合の第一歩を印するものと謂ふべし、是れ上人法勳の第三にして尤も後代に光輝あるもの是なり」

と、雜亂撤廢信仰歸一、門下各教團統合、立正大師號宣下に對する法勳を擧ぐ、眞に然ある。今や門下合同の一部を見たが、

本章問題等は將來に課せられてゐる。

生師が統一團を組織し、或は天晴會・講妙會・地明會を起して全國的に信仰團體が出来し、日蓮主義が有識階級の注意を喚起し日蓮主義信仰の機運を醸成せし源は、師の盡瘁大に力あるものである。或は神・儒・佛三教の融合を圖り、我國文明の系統を糺して、思想善導に東西走せる其の功績も見て置きたい。

四、生師の著述

生師の著述としては、大藏經に關しては、大藏經要義十一卷、綜合的佛敎觀、優婆塞戒經通解、大乘本生心地觀經通解各一卷。法華經に關しては、法華經講義二卷、法華經要義、法華經大觀、法華經の心髓、法華經講演集第一輯各一卷。御書に關しては、開目鈔詳解上卷。日蓮聖人聖訓要義十卷。本經祖書に關しては、聖語錄、日蓮主義の心髓各一卷。日蓮教學に關しては、本尊論、日蓮主義綱要、日蓮主義初歩、立正大師(一名日蓮聖人の主義主張)、日蓮主義精要、日蓮主義戰士の伴侶各一卷及び小林日至上師と編輯せる本宗綱要一卷。聖傳及び人格に關しては、日蓮聖人正傳、日蓮聖人の感激各一卷。特に信仰に關しては、佛敎信仰の正統一卷。日蓮主義より思想信仰に關しては、軍人精神、日蓮主義研究講話、日蓮主義、人と教、國民道徳と日蓮主義、日蓮主義の運用、法華、東洋文明の權威、國民教化、思想問題の歸結と法華經、信仰修養思想より論じたる日蓮主義の本領各一卷がある。其他小冊子は之を略す。統一團より發行の統一團報改めて「統一」は今日及び、本年生師の祥月忌を迎へて、五十年六百號になつてゐる。思

國會機關誌「教」もある。而も幾多の著述の中に、法華經講義と大藏經要義は名著だ。但し、大藏經要義と開目鈔詳解の未完は惜しい。

五、生師の教學

(一) 本 佛 論

生師の教學は、本佛中心の教學にして、法華經講義の題旨に依れば、法華經の大綱を捉へれば、法華法門方便品と本門壽量品とに互る教義を以て佛敎の根本義とし、天台大師が方便品に由りて佛敎を見たる所論と、聖祖が天台及び方便品を攝收したる以上に更に壽量品に由りて佛敎に下したる開迹顯本の見解を以て佛敎の全體となし、これ以外眞の佛敎あるなく、是れを佛敎の正系とす。

佛敎の正系たる天台の教義と、それが發達の頂點たる日蓮の教義とは何ぞ。天台の方便品を見たるは、要するに教行人理の四一開會の法門にして、日蓮の壽量品を發揮したるは、正しく教理行果の四法光顯の妙談である。この四一開會と四法光顯とに於て、重複せるは教理行の三法門にして、異なるは人開會と果法光顯である。この相違は興味ある問題で、迹門は從因至果的に先づ迹者に論を起し、二乗作佛女人成佛を説き、無一成佛の妙旨を宣示せし人開會の法門にあり。又本門は先づ本佛を認めて其の三輪の妙化に佛敎の本源を定むるもの、即ち從果向因的の議論で、是れ果法の光顯より來る大教義である。この相違は、天台と日蓮との佛



この五箇の問題に就て、第一着に講究すべきは佛身觀である。この前後の關係は、佛敎の起りし順序、及び壽量品の極意より推定する所にして、決して予の私見では無い。天台は、迹門の諸法實相を説明すべく起れりと云ふも、予の所見にては、迹門も亦佛陀の慈悲より教法の興起を示す。方便品には、

「舍利弗當知、我以佛眼觀、見六道衆生、貧窮無福慧、乃至爲是衆生故、而起大悲心、乃至即趣波羅奈、諸法寂滅相、不可言宣、以方便力故、爲五比丘說、是名轉法輪、便有涅槃音、及與阿羅漢、法僧差別名」

と、佛陀の教を垂れ給ひしは、實に慈悲心の發作より來れる事明らかにして、佛敎とは、佛陀意輪に依りて衆生濟度の教化を垂れ給ふ說法に基ける事疑ひなし。されば佛敎研究は、必ず先づ佛身觀より出發すべきである。予は、佛敎の興立を左の順序とす。

佛陀の慈悲：成道：轉法輪：教法：理法：行法

更に今番出世の釋尊に約せる所論を壽量品の教義に照し、之を開顯して無始實在の本佛の上に説明せば、一層明白なり。

無始實在の本佛：意輪(慈悲)：身輪(出現)：口輪(教法)

此の如く教法は、本佛が常恒不斷の大慈悲意輪より出現して説法せるものにして、佛敎の本源は、實に佛陀に存せる事明白なり。

教觀の根本的相違を洩せるもので、凡そ果を基點とすれば、佛敎の興起は、吾人を救はんとする佛陀の慈悲より來れるもので、其の重要な教義は佛陀觀に存し、人身觀の如きは第二位に屬す。

天台は根本に從因至果的主義を有する故に、其の佛陀觀は、一應は無始の三身を立つるが如きも、是れを究極すれば、毗盧遮那理法身の一身に歸し、無始に於ては佛陀なく只無明あるのみ、法界は迷者の集合場のみ。日蓮は是れに異り、先づ慈悲圓滿の無始の本佛を認め、この本佛即ち果法より立論し、斯くて其の口輪の下に教法を立て、其の教法の内に理法を認め行法を定めたるものなれば、其の所論は佛界緣起の法門である。無明より出發する佛敎觀は、壽量品を除くの外全佛敎各宗派に共通せる所見にして、小乘より權大乘に至る迄、皆この主意に基かざるは無く、迹門も亦同じ。されば人開會と果法光顯とは、實に小乘より迹門に互る教義と、壽量顯本の妙旨との大關係を示し、佛敎の本質は、この二大教義を出でず。上に悟れる本佛ありて、衆生を救はんと慈念して教法を垂れ、下に迷へる衆生ありて、佛陀の教を被らんと渴仰して、こゝに教法を樂欲す。佛敎は、この迷悟生佛の關係を出でずして、教理行は佛陀と吾人との間に要する媒介者に過ぎず、迹門の人開會の妙旨と、本門の果法光顯の妙談が、直に佛敎の眞髓、本質、全體で、一代佛敎は、此の因人と果佛との關係に就て深遠巧妙の議論を煥發したものである。

こゝに於て、人開會と果法光顯との二大教義を探究すれば、佛敎の本質、佛陀の眞意を悟了し得るが、更に、この二法に教理行との三法を加ふれば、佛法は、左の五箇の問題となる。

この思想は、小乘より本門の極處に至る迄、終始一貫せる所に於て、佛敎の眞意を窺はんとするにも、この佛陀の意輪を定むる事、最先要の事である。縱し佛敎の教理若しくは行法を如何に研究するも、佛陀に對する意識鮮明ならずば、佛敎の眞意を得べからず、之に反し佛陀に對する意識定まらんか、教理行法等自ら正明なる解決を見る。故に佛敎研究の順序は、佛身觀を基點となすの適當にして、且つ有益なるを唱道する。

佛身觀に次では佛陀所説の教法に對する所見を定むべし。教法とは、即ち佛陀大悲心の發動より、迷衆を濟度せん爲に説示せられたる化導の法門に外ならずして、又其の中の大部分は、佛陀に對する意識を教へ、この他法界の觀察と、人身の觀察と、行法の規定とを宣示するものである。(法華經講義上卷題旨往見)

生師は、斯く佛敎の研究には、佛身觀を基點となすべきを論じ、本佛中心の思想を力説した。其の本佛とは、三世十方を盡して一切の佛菩薩等を總統する三身即一の上に論ずる應用不斷の久遠本佛釋尊であり、この本佛は壽量品所顯であり、伽耶に即する顯本、生身の佛即眞身の佛、現實の佛即理想の佛、歷史の釋迦牟尼佛が即教理的の本佛と開顯する壽量顯本の妙説であり、其處には應身常住の妙談が存するは勿論である。又師の云ふ五法たる佛身觀・教法觀・法界觀・人身觀・行法觀は、師の佛敎觀であると同時に、法華經觀であり、法華經の五大要義であるが、今は其の解説を省略する。(同題旨往見)

(一) 本 佛 論

生師の本尊觀に就ては、其の著本尊論に於て論じ盡くしてあるが、要は、師の本佛論中心の教學に基きて、本佛中心の本尊論たる事は論を待たない。戰士の伴侶に

「信行本位の上からは必ず人格實在を中心としなければならぬ。それは有ゆる方面から立證される。故に信行本位より觀察する本尊、それから授戒式の方から觀察する本尊、三寶式から觀察する本尊、何時も私はこの三つを詳解して居る。本尊を本尊として觀察するのが三寶式である。本門の戒壇の方から觀察するのが授戒作法式である。本門の題目と云ふ信行の方から觀察すれば、人格實在の本尊である。三大秘法の三方面から觀察して本尊の要義歸結を見なければならぬといふのが、日蓮教學上の内部に於ける觀察である」(戰士の伴侶一七五頁)

と、今は本門の戒壇の方よりする授戒作法式觀察と、本門の題目と云ふ信行の方よりする觀察を省略して進めると、師は佛敎通規たる歸依三寶の上より本門の本尊に對して歸依三寶式觀察を下し、最高の三寶として、本佛の實在を中心として本佛稱尊、本法妙法蓮華經、本佛本化上行菩薩等の本門常住の三寶を本尊の主體とする。

而して本佛・本法・本化の三寶に於て、佛・法・僧の次第を知つて、調節的に信解を主張して、末法有相信行の上に別相三寶を採り、若し一體三寶を見んとするならば、佛中心の一體三寶を採る。生師が大藏經要義に、南本涅槃經卷第八如來性品第十二の別相三寶と一體三寶の文の解釋に

「學佛の徒一體三寶を言へば、法性中心、法實中心、己心中心、

の教義である。こと類る明瞭であつて一點の疑ひを懐く所はない。然るに觀念米の思想の影響を受けて、日蓮教學の上に一體三寶を己心本尊の側にうつしたといふことは、これは先輩の學說が間違つて居るのである。(本尊論三九頁)

と説き、更に勝鬘經一乘章第五の「作無盡歸依、常住歸依、者、謂如來應等正覺也、乃至、無異、如來、無異、歸依、如來即三歸依」の文を引證し、如來を正面に置いた佛中心の一體三寶即ち如來を信すれば法も僧も其中にある。一體三寶を採るならば即ち佛實を表にして法實・僧實を包む故に如來は即三歸依なりと述ぶ。(大藏經要義卷一、三二三頁往見)

而して、日蓮主義綱要義の本尊に關する要義(下)には

「三寶式は絕對本佛の釋迦佛(釋迦如來は實在である)、それから妙法蓮華經(妙法蓮華經は理屈でない即ち五字一音の題目である)、それから僧としては上行菩薩、今我等の爲には日蓮聖人として出られた。この釋迦本佛を信じ、妙法五字一音を信じ、上行菩薩の再誕日蓮、及びその末弟を信じて行くのが、法華宗の信仰である。この三つが決して邪魔になるものでない、纏めれば、今言ふ絕對本佛の慈悲である、之を形式に寫せば、實在の本佛が嘗て世に出で説き残した一切經を、結要して妙法蓮華經の五字、その釋尊第一の高弟上行菩薩、命を奉じて大日本帝國に生れたる日蓮聖人となる。その教は今猶ほ現存して遺文録の遺訓となつて居る、その正義を傳ふる者は今猶ほ現存して居る。故に吾等の信仰は、日蓮聖人に依り、遺文録に依つて正さ

僧實中心の一體三寶あるを知つて、佛實中心の一體三寶あるすら知らず、況んやこの義に於て猛利決斷せんこと剛刀の如くなるべしとの誠告あるを知らんや、彼等が佛敎研究の粗糲暗昧なること知るべきのみである。予は毎に言ふ、信行の上には別相の三寶に於て調和的の信解を保持するを要す。若し理義の上にて一體三寶を見んとすれば、佛中心の一體三寶に歸趣せずんば、信行と矛盾し、信智一體の歸結に達し難しと力説するのである。予がこの主張を天下に告白するや實に年有り、而もその當否に對して責任ある意見を示す者殆んど之れ無きは、これを佛敎學の衰頹と云はん、信解米道の不熱誠と云はん、寔に長大息に堪へざる所である」(大藏經要義卷三、二〇七頁)

と論じ、本尊論には

「若し一體三寶を論ずるならば、佛の一つに法も僧もみな入つてしまふ。法華經も釋迦牟尼佛の御覺より來り、上行菩薩も釋迦牟尼佛の活動より來る。本佛いませば法華經も上行のみならずの中に入るのである。これは本佛の三輪の妙化と申して、本佛の慈悲の意輪といふものがあつて、その慈悲の心から身を現する場合に、いろいろの相が現れる。その中に行菩薩等もあるのである。それから口輪を以て説法する、その中に法華經はあつて、この身を現じ法を説くといふ本元は佛の御覺の意より出づるものであつて、これは即ち佛である。佛の意輪より出でて種々に身を現する身輪となり、種々に法を説く口輪と現れるものである。これを身口意三輪の妙化といふのである。故にこれを纏めれば實在の本佛一つに歸着するといふのが善量品に

れ、法華經に依り又この法華經を纏めた妙法蓮華經に依つて導かれる。さうして實在不滅の釋迦如來は、今も此處に現存して御坐る、丁度母親と乳房の關係の如く、吾々は赤子の如く、信仰の心を以て南無妙法蓮華經と唱ふれば、其處に一切の願望を成就するのである。吾々の信仰を本にして、その信仰から確かりした希望を懷いて現在の世に活動を起して行くのが、日蓮聖人の本尊の思想であります。どうしても簡單に申せば、三寶式——佛・法・僧の三寶の方式を整頓して考へることであつて、それが衝突の形になつて、日蓮聖人を難有がつてお釋迦様を忘れたり、妙法を有難がつてお釋迦様を忘れたり、お釋迦様と言へば日蓮聖人を忘れたりするやうな、片輪の事のないやうに、さうして若し一つに纏めて見たいと思ふならば、絕對本佛に纏めて、慈悲身口に憑じて二身(如來殊王身—統一的佛身)の應現二鼓(天鼓—顯正的快語)の宣揚と云ふ所に纏めて、一つにする」と云ふことが、大事なことであります。(日蓮主義綱要二八二頁)

と、斯く本尊の三寶觀を信解せば、決して遲滞はない、だが本尊に於ける法佛の關係は、古來から問題だ。其處で生師は法華經講義の序説、唯一本尊の光顯の節目に、

「上人の見解によれば、法華經は大木尊を光顯するために示されたる教訓に外ならず、法華經は能詮の教門にして、所詮の實質は唯一の本尊なり。而して本尊の本體は、本佛と本佛起用の形態とを一具したる所なり、その實體的説明に於ては前來説く所の佛界緣起の法體論にして、又三身論中には應身常住の佛陀觀

は究竟圓慈説に歸題して、これ等幾多の妙旨妙解は悉く唯一本尊光顯の上に結束せられ乃至教道の説明の上には本佛三輪の妙化に於て聲色爲經の妙義を示して、之を本尊の上に光顯するなり。本尊論と稱して上人門下に爭議なきにあらざるも、畢竟本化別頭の教觀を明らめざるより来る淺見の失にして、上人光顯の本尊はその眞意昭々乎として惑ふ所あるべからず。其は法體の説明よりすれば佛界緣起論にして、迹門及天台門下に於ては法佛に前後を見て法本人迹、法勝人劣を見つるも、本門及日蓮上人に於ては法佛は全然一體にして、この佛界緣起の當相を指して法と云ふべく、又佛と呼ぶべく一體の二名に外ならず、人法全く一體にしてその説明は明白なれども、教道の説明にありては、能説の佛と所説の教とを分ち、又この教に就て妙法蓮華經を最上醍醐として、之を聲應爲經、色應爲經の妙旨に照して、妙法蓮華經に本佛圓慈の大功德を具有するを示すが故に、この善門には全く能説の佛と所説の法との不離を示せるなり」

（法華經講義上卷一之卷一七頁）

と。本章の本體は本佛と本佛起用の形聲とを一具せしものにして、其の法體の説明よりすれば佛界緣起論を採りて人法全く一體なりとし、其の教道の説明よりしては能説の佛と所説の教とを分ち、この教に就て妙法を最上の教法王として之を聲色爲經の妙旨に照し五字一音は、本佛の功德力用を具有すと爲して、法體の説明と教道の説明に依て法佛關係を解釋し、教道の説明に於て聲色爲經の妙旨とは、

法華經講義序説の聲色爲經の節に、

悉く唯一本尊の光顯の上に收攝結束せらるる所なり（法華經講義上卷一之卷一四頁）

と。これ色聲法の三應爲經の眞義を本佛三輪の妙化に接合して、妙法五字一音の最勝の教法王にして功德聚、總持眞言陀羅尼王にして而も觀佛王なるを明す。若し是れを略述せば、日蓮主義精要の釋迦如來の標節に、

「曼陀羅の中央に南無妙法蓮華經と書いてあるのは、釋迦如來が肉身滅すと雖も、我が相を見たいと思へばこの法華經を留め置くに依つて、妙法の文字を拜した時、そこに我は實在せりといふことを信念せよ。肉身は見えぬけれども我の本懐を留める妙法蓮華經の文字は汝の肉眼を以て見ることが出来るから、妙法の文字を拜する時、そこに我が實在を憶念し來たり、妙法の音聲汝の耳に響く時、側に本佛在りしてこの教を與へ給ふと信じなければならぬ。だから法華經を受持し正憶念するところ釋迦牟尼佛を見、釋迦の御口からこの經を聞くといふ。この釋尊を見るとき、妙法蓮華經の五字である。五字といふ文字に現してある時、これを釋迦牟尼佛を見るとき『見佛』に代つて居るのである。それから一聲の南無妙法蓮華經と唱へるこの聲になつて居る時には、佛口よりこれを聞くのであつて、佛の御口よりこの經文を聞くといふ『聞法』といふことに考へたら宜しいのである。釋尊の尊とき御聲からこの教を聞く、自分の聲で南無妙法蓮華經と唱へるのだけれども、それは此處に本佛がお在になつて尊とき教を與へられて居るのである。題目の聲耳に響く時、その一音の聲は本佛の御聲なりと憶念し、

『日蓮上人の三應爲經の眞義は、天台云ふ所の法華の佛身を色聲の勝妙なるものとし、法華の教門を聲應の上乗とし、佛の智慧を法應の精要となすの義を推究し發展して、上人獨得の事顯本の妙旨を示せるなり。即ち具體的本佛の無始實在、佛界緣起、究竟圓慈等の意義より本佛の身輪を説明し、以て佛身觀を光顯し、又教門に就ては本化別頭の教相を發揮するのみならず、廣略要の説を以て妙法蓮華經の五字に法華一部を結要して、この五字を聲經中の最尊無上の甘露味と爲し、而してこの本佛口輪の結要は三輪五融の上より本佛の意輪に有する慈悲、慈善根力、功德力を悉くこの五字の聲經に包籠せしむることを開示し給ふ。この理證は應々法々の理證の上に更に佛陀の淨用に約して之を誠證し、又前の佛身の身輪は滅後有相行のもの爲に、妙法五字の色應に於て具有せるを説き、一箇の妙法蓮華經の一應は聲應王にして即總持王なり、又その五字の一句は色應王にして即觀佛王なるを説き、又意輪の智慧に就ては本佛の圓慈を光顯して智慧一體の悲を取り、本佛常恒の慈愍我等の頭上を照して、曾て止息し給はず、この大慈悲心に感じて發起する信念は即ち法應王なるを説きて、事觀の妙處となす。故に天台の如く險安心を對境となさずして、本佛常護の大慈大悲を念じ、妙法蓮華經の文字を拜する時は、ここに本佛身輪の實在を信じ、本佛口輪の妙化を感じ、又妙法蓮華經の聲音耳に觸るる時、妙法蓮華經の文字眼に映する時、益々本佛常護の大慈大悲を追憶して、かくて口唱禮拜悉く本佛大慈大悲の感信を増進するを三業相應の妙行と云ひ、三輪常住の妙化と云ふ、これ等の妙旨は

妙法五字を拜する時、その文字を通して本佛の實在を意識信念して行くのである（日蓮主義精要四五三頁）

とある。吾人が本佛を仰ぎ教法王なる妙法蓮華經の色應王にして即觀佛王、聲應王にして即總持王なる五字一音を口唱禮拜する時、見佛聞法の利益を得て釋尊の功德を受得する。日蓮主義精要釋迦如來の章にその一聲の南無妙法蓮華經の聲は、我が一代五十年の説法を纏め、八年の法華經を一聲に纏めたものとして、汝が南無妙法蓮華經と唱へるその聲が耳に響いた時、靈山會上八年の説法を拜聴した歡喜と等しい考へを其處に起せよといふことを仰せられた。妙法の五字眼に觸るる時釋尊の實在を憶念したてまつり、妙法の聲耳に響く時、御佛そこに在せりと感懐をして南無妙法蓮華經と唱へよと説かれたのが法華經の正系の教義である（日蓮主義精要三九九頁）のが唯一本尊の上に光顯してある。この法佛の關係を把持して、本佛・本法・本化の本門常住の三實に歸依し、本佛常護の大慈悲を追憶し感懐するのが、法華經旨の歸結妙處にして、其の妙旨は悉く本門の本尊の上に收攝結束せりと觀て行くのが、生師の本尊論である。

(三) 教相論

生師の教相論は、法華經講義上卷一之卷序説に本化別頭の教相と題して詳説す、然し一般的に特に力説せる點は、判教として相對判と絕對判である。立正大師に依て語ると、

「判教とは教を分判するといふ事、一應言へば分けることでありますが、併し唯だ分けるばかりでなく、日蓮の判教は相對判、絕對判といつて、相對判の場合には對立してその優劣を見

る譯であります。絶対判の方では開顯統一するのであります。相對判は折伏の意味がある、絕對判は開顯とさうして統一の意味がある、この二方面が日蓮の今の主義（統一主義にして折伏主義と開顯主義の二方面を附屬す）から導かれて居るのでありますから、日蓮の判教は相對判、絕對判として考へなければならぬ。

相對判の方はどう現はれて来るかといふと、第一が「内外相對」第二が「大小相對」第三が「權實相對」第四が「本迹相對」大體この四つに分ける、この以上はキウ一つ立てる人があるけれども、これは無駄な事であつて、本當の判教にならない一言であります。即ち「種脱相對」といふやうな事を言ひますけれども、それはお経ではない、機根に約したものであつて、判教ではないのであります。これは議論のある所でありませうけれども、左様な事は無駄事である。日蓮聖人の教義に現はれたのはこの四つが相對判で、その最後に絕對判を以て、一旦缺けたる所を教へたものを、敵對行為が無くなれば悉く一切を統一してしまふから、そこで三道（儒外内）貫串となり、一切佛敎を統一することになつて行く、この相對判と絕對判とが、前に述べた主義から導かれて來て居るのであります（立正大師九三頁）と、内外大小權實本迹の相對判より最後に本門の教旨を以て開顯統一する絕對判を立つ、而して從來謂ふ所の五重相對中第五の教觀相對（教とは本門、觀とは妙法五字）又は種脱相對（種とは妙法、脱とは本門）を機根に約せしもので判教に非ずとして持する。又絕對判を詳説すれば立正大師には、

「絕對判といふのは、一切の教義の中に於て最高の教義は何れに在るかといふことを決定して、その教義に對して他のものは比較することが出来ない超越的なものであるといふことが、絕對判といふことであります。相對判に言へば、内外、大小、權實、本迹に於て前に申したやうに違ひがある。最後に本門の教旨が即ち絕對であつて、それ以上の教義は佛敎の中に無い、隨つて他の教義に於てもこれ以上のものは無い、といふことを決定するのが絕對判であります。併ながら絕對判といふことになれば、比較をして他のものよりも勝れて居るといふのではない、他のものより勝れて居るといふことは、相對判の本迹對の場合に於て本門が勝れて居るといふ事を説くのであつて、絕對判の場合には、その本門の教義が總て他の教義を支配し、或る場合にはこれを活かし、或る場合には之を斥けるといふ、活殺自在の絕對的權能がこの教義にある、即ち統一の中心がそこにあつて總ての教義を統一したる所の力がある。斯ういふ意味になつて居るので、勝れて居る意味合と、他のものを活かして來る意味とを併せて考へなければならぬのであります（立正大師一〇五頁）と。日蓮主義綱要には、

「絕對判と云ふのは、即ち法華經の壽量品の教を基に致しまして、凡てを——即ち迹門でも、權大乘でも、小乘でも、其他佛敎以外の教に至るまで、悉く之を捲いて、即ち開顯統一と云ふことを致します。その場合には一切の思想を打つて一團と爲して、惡きものを捨てる善きものを採り、淺きものを啓發して深

き思想に導き來り、渾然として一大理想の文明に導かんとする所の大精神が、日蓮主義の判釋の眞意であります（日蓮主義綱要四頁）

と。この相對判と絕對判が了解せらるれば日蓮主義の判釋も粗立も會得せられるとする。生師が神・儒・佛三教融合の運動も大藏經要義の活釋も、日蓮主義判教の立場に存す開顯統一主義の顯現である。

(四) 基準御書論

生師は大聖人の遺文に於て開目鈔を以て最高基準第一の位置を占むるものと主張し、開目鈔上卷に、
「本書著作の緣由は上行再身の自信と、佛敎統一の大權を發表するに止まらず、その主義主張に於て、佛敎統一の實義を光顯せんとするにあり（開目鈔詳解上卷一〇頁）
とし、其の佛敎統一の實義とは、

「日蓮の開目鈔に光顯する本佛顯本の大教義は、恰も日光の燦爛たるが如く、大厦の宏壯なるが如し、故に先人未説の大教義を開顯して、佛敎統一の大事を成就するは、一に開目鈔に於て明示せる本佛顯本の一事に懸る（同二四頁）
と。更に聖祖佐渡の講流の實狀より、
「聖人は佐渡の講流は生還の期も難きを思ひ何時死すとも悔なきを期し、こゝに畢生の大事を傾倒して、悉く本書中に宣示す。故に本書は滅後法流に浴する者の爲に、遺留せられし聖人血涙の遺言狀なり。心ある日蓮主義者はこの意を領し、先づ以て開目鈔に精通するを期し、思想行為の最高指針をこゝに取るべき

なり（同二六頁）

と述べ、而も五大部中に於ける開目鈔と本尊鈔とに就ては「この五大部中に於ても、特に開目鈔と本尊鈔とを以て、重要書中の最重要書と稱す。但し本尊鈔は記述簡潔にして往々讀者の間に疑議を生じ易し。開目鈔に至りてはその記述頗る明了にして、何人も疑議を挾むの餘地なく、而してこの中に所謂「まことの大事」を論明せり。故に日蓮主義の眞意を正解せんとせば、遺文中本書の右に出づるものなく、健鈔には開目鈔は聖人遺文中の王なるが故に、昔は本書を録内の巻首に置きたりと云へるが、これ實に深く記憶すべき所なり（同二二頁）
と論じ、品川本光寺合掌阿闍梨日受上人の御書基準に隨つて、師は、

「開目鈔は日蓮教學上の最高標準にして、實に幾多の遺文中に在りて、最第一の位置を占むる名著也、故に日蓮主義者は必ず此書を最愛の要書として之を尊信し、座右を離さず熟讀精通を期し、由つて以て教學上の指針と爲すは勿論、廣く一切事を判斷し、解決する標準を本書に取るに至らんことを、是れ子の切望して止まざる所なり（同二五頁）
と斷す。隨つて、師は開目鈔詳解に序して
「日生若し本化別頭の教觀に寸功ありとせば、恐らくは此の詳解ならんか、若し幸に予をして法門不滅ならしむるにありとせば、其は或は此の詳解ならんか（同序三頁）
と。惜むらくは、師の繁忙をして開目鈔詳解下卷は未刊行だ。然し聖訓要義の卷二卷三に互つて開目鈔上下の要義を説き、或は

日蓮主義精要には開目鈔の綱要を明し、其他幾多の著述に開目鈔の眞意を解説してある。師の壽量願本の本佛論光揚の立場は、生師をして斯く絶叫せしむ、序言眞に力ある。

○ ○ ○
生師の教學を語れば盡き無いが、此の邊で擧ぐ。今日蓮と迄稱されて敬慕された教傑だ、今に生師の遺徳止み難い。師は詩歌俳句繪何れも嗜まれ無い、書は其の立場上かゝられるので練習もした、其の書は氣品がある。故松尾清明師の談に依れば、生師の處女作で又終世の絶句がある。

「天何を云ふや四時運行茄子生る。鳳凰山人」

と。松尾師が大阪朝報選者故墨水(子規の弟子)に、この句を示せし所「この句達人破格の句か、冠頭破格にして無理ならず、末五茄子生るは最もよし、鳳凰とは誰か」「東京の本多日生師なり」「あの雄辯家のフォーム」と。
私が今筆を執る妙願寺の書齋は、嘗て日生上人若くして東上の砌、私の師範吉田義着を尋ねて草鞋をぬがれた跡だ、實に感慨無量である。
法華支義卷六下に應生の眷屬の語がある、聖應日生の名、まさ

に聖に應じて應生せる歟。

本多上人第十五周年忌報恩會

日時 三月十六日午前十時(時間勵行)

場所 品川妙國寺

行事 法要 展墓

以上

財團 統 一 團

○當日空襲警報發令アリテ定刻二時間前迄ニ解除セラレザル時ハ翌日ニ順延

實體と形式の調和

原 事 明

何事によらず、大は大自然小は小なりに形式に執られて其の實である内容實質を忘却する時、其の形式は無意義に終つて仕舞ふ。此の形に執られるといふことは昔も今も亦、將來も變らない人間の通弊である。故に言葉、文字は違つても何百何千年の昔から現實の教の中にも形式に執るなど嚴説されてゐるので、今更事新しいことではない。然るに現下の日本にあまりにも此の形式主義が横行し、實蹟が擧らないのは前に歎かほしいことである。形式に墮して國を亡した實例は東西古今その例はあまりにも多い。警戒すべきことである。次に最近自分が見聞した實例の一、二を御覧考に供しやう。

目的に即せない形式——私が或る農家に行つた時、其の家の主人が茶呑み話に曰く「自分は米内大臣が、大臣様の地位に在りながら配給米の量で一日の食事を済ませられてゐられると聞いたので、いくら自分の作つた米とはいへ腹一杯食つては勿體ないと思ひ、農家の配給米の量で済ませて見た。だが、それではどうしても體力が續かない。一日三度の食事の外に四度五度と茶を呑み、それで體力が衰へて仕事の能率が擧らない」と云ふのである。其處で私はその人に話した。「イヤ實に感激に堪へない近頃の美談だ。しかし君は少し考慮ひしてはゐないだらうか、君の家は農家であつて、食糧の増産と云ふ現下重大な使命を負はされてゐる。

食糧の増産には激烈な勞働を要する。それには腹一杯とは行かないとも、體力を保持するだけの食糧は攝らなければならぬ、配給米量で不足なら芋でも大根でも足し食ひして、免に角ウツと働く力を付け、配給米で七時間しか働けないところを十時間、十二時間働いて、積極的に増産に乗り出すのだ。君の其の純情誠實の心掛けで働くなら一倍半、二倍の増産は困難ではなからう。家族に三人も四人も働く手を持つて、腹がへつた腹が減つたと一日フラフラしてゐるより食つて働いた方が本當の御奉公と云ふものだ。さうしてウツと増産し日本に食糧が豊富になれば、米内さんも腹一杯食つて下さるに違ひない」と云ふと「成程ネ、自分の考慮ひであつた。さうして見ませう」と腕を組んでゐた。なほこの家では芋の供出は完納したが、自分等は作つた芋は一本も喰はず買つて喰つてゐるといふ。其の理由はといふに、先づ芋を完納し人様に喰はしてから後に自分等が喰はふ、供出割當ての量以上に澤山作つてあつたのだから、自家用の芋なら早くから喰つても差支へないのだが、人の喰はぬ前に農家だからといつて早くから獨り喰べては街の人に氣の毒だと云ふのである。實に感心な心掛けである。子供等に芋々とねだられても決して握らなかつた。其の内に米の供出時が来て、町の方からは早く早く、早く出してくれなければ町民に喰はす米が無い、一日も早くとせき立てられ、毎日忙しくて芋を掘る暇がない。さうしてゐる内家さの時季になり、畑で芋が腐つて仕舞つたのであつた。

關横行の時代に、斯様な純朴な農家もあると云ふことは洵に心強い限りで、これに對し兎や角理屈を差し狭むことはどうかと思

はれるが、世の中は理屈ばかりでも行かぬが、人情ばかりでも危
い。配給量と云ふ量の型を守らうとして仕事の能率を下げ、人様
に喰してからと云ふ情の型に執れて手を腐らして仕舞つた。こん
なことなら早くから手を喰ひ乍ら力をつけ、能率を擧げてをけ
よかつたのである。米内さん首相の當時のニュースに出てくる姿
は水々しい張切つた姿であつたのに此頃のニュースに見る米内さ
んは痛々しいほど拵せてゐる。おほかた配給だけで食量足りな
いのだらう。吾々がテレレ肥つてゐては申譯けない、共に拵せ
て居らうと云ふことは、情としては涙ぐましいものであるが、目
的の本末を誤つてゐるものである。農家の目的は増産と云ふ一本
途であるから、これに最善最良の方法が取られなくてはならぬ。

今一つの例は、防空演習である。家庭防火に於て水何斗、砂袋
何箇、それに梯子と火ハタキと云ふ具合に決められてゐるが、そ
れが都會も田舎も一律同様な形式に行はれてゐる。然し實際の場
合は、都會と田舎は土地、家屋の状況に大きな相違があり、又同
じ田舎でも野原に在る家と、山に在る家とあつて状況が様々であ
る。此の土地家屋の相違によつては防火の方法にも千差萬化の方
法が取られなければならぬのに、同一同型の防火器具が備へられ
てゐるのは、此れ形式主義の最も良い標本であらう。防空の目的
は火を防ぎ人命を護ることにあるのであるから、これは各人各家
の自發的創意工夫によつて我が家・我が土地・我が町村市街の状
況を斟酌して最善の方法が造り出されなくてはならない。例へば
山に在る家は水の不足と云ふことが一番の缺陷であるから水も澤
山貯へ、殊に發火の初めに消し止める用意が要る。それから周圍

の枯れた雜草等を刈取つてみないと周圍から延焼される危険が充
分にある。此處は家藏きではないから延焼等の心配はないとは限
らない。これに反して田圃の中の家なら、周圍の河や沼の水を利
用すればよいから、山の家とは大いに方法が違つてくるわけであ
る。其の他家屋の大小、家人の人数等により火ハタキ、梯子の類
が多くてもよい。必ずしも規則通りにしてをかねばならぬことは
ない筈である。それが命令されたら命令されただけの道具を準備
して安心してゐる。命令を下す方も、命令しただけの器具が揃つ
てゐればよしとしてそれ以上の指導もしてゐない。甚しいのにな
ると、監督が廻つてくると五月蠅いから一通り揃へて置けと云ふ
わけである。だから器具の一つ一つが、一つも實用的になつてゐ
ない。自分の命を護り自分の家を護る防空演習であるのに、命令
だから仕方がない、五月蠅いからと云ふ具合である。本當に言へ
ば、自分自身を護るのだから、自分で防空のことは本氣で考へ色
々と工夫もし、自ら進んで指導者の指導も受け準備もしなくては
ならぬのである。此れが形式主義の形式倒れと云ふのである。

これは唯だ防空の事だけではない。今日の戦時體制の行政、教
育、産業等、凡百の事に此の弊風が見受けられる。其處に戰意の
低調、生産の不振と云ふ亡國の遺床が作られつつあるのではある
まいか。日本は神國だから敗けはしないだらう、毎日氏神様へお
参りしてゐるのだから、今に神風が吹いてヒリッピン沖の敵艦が
デングリ返つて皇軍大勝利の秋が来るだらう。さうしたら銀座も
復興するし、日本劇場も開くようになる、それからそれからと、
甘いことばかり考へて神様や軍人ばかり頼つてゐる間はドンド

ン戦は敗けて行く。大乘佛教流布の國だ、日本に敗戦國と云ふ汚
名は絶對あり得ない、殊に日蓮上人の出られた國だ、大地はささ
ばはづるとも日は西より出るとも、法華經の行者の祈りの叶は
ぬべきことある可からずだ、最後は法華經で祈ればよい、敗けは
しない等と自惚れてゐても、大乘佛教有りと雖も流布せず信ぜら
れず、法華經、日蓮上人の精神は曲げられ折られ、魂の抜けた法
華經、日蓮上人になつてゐたのでは、幾ら祈つても驗しはない。
形の上では敬神崇祖が立派に出来てゐるやうとも、神意に叶はなけ
れば天譴もあり神罰もある。如何にお題目が昌んになつて来やう
と、要は其の精神にあり、教學が正しく信ぜられてゐるか否かに
ある。

目的に即した形式——私の知人にAと云ふ人がある。此の人は
早起・掃除・體操・動行と云ふことを實行し、仕事は八時間と
決めてゐる。家族の者もこれを勵行してゐる。Aの意見を聞くと
「此の決戦は何より健康が第一だ、自分が斃れても家族に一人の
病人が出来ても直ぐに無駄な努力と時間が取られ、心配して生産
率が下る。それには早く起きて室内の不淨邪氣を拂ひ、新鮮な空
氣を入れて體操をする。それからお經を上げて戰勝を祈り、祖先
の供養をして仕事にかかる。一時間位ひかかるが、これで一年中
家族に一人の病人も出さなければ、能率の上から見て大した得で
ある。八時間の仕事と云ふのは米英流と人は喰ふか知らぬが、私の
年齢、體質には最も適した時間なので、これが最も能率的なので
ある。時々徹夜をして見たり十二時間位も働いてみるが、疲を出
したり病氣で敷れたりして、結局一月一年と計算して見ると損を

してゐる。八時間充分働けばよい。本當に八時間働くと能率も擧
がるし心身共に何時も壯快健全だ。米英では前から八時間制の勞
働であると聞いてゐるが、その八時間は黙々として精神を打込ん
での仕事の時間であるから、此の點彼等に敗けてはゐない。日本
人の十時間、十二時間労働と云つても、仕事の間に休んだり、話
をしたり、雜用を交へたりして、實際は八時間位の能率しか擧つ
てゐない。それでは已に三時間四時間と時間の損をしてゐるわけ
である。何時も健康で、仕事も順序よく働く時は、身心を集中
して本當に働く、そして時間を削出して他の雜用に向ける。何時
も健康、精神壯快、明朗敢闘、自ら涌き出て来て其の上家庭の和
樂、道義の涵養等の副産物もあつて好い結果が色々出てくる」と
云ふのである。

早起・掃除・體操・動行・八時間労働と云ふのは、一つの形式
ではあらうが、此の人としては最も自分に適した方法形式を案出
して、その目的どするところの生産力増強に役立ててゐるのであ
る。これも萬人此の通りの形式に依らなくてはならぬと云ふこと
はない、各人の體質・仕事の種類・周圍の事情により適宜に判斷
して、健康に明朝に能率増進に工夫して行けばよい。八時間制と
云ふことも一般的には良い方法であるかも知れないが、仕事によ
つては斯様な事務的なことではないけなしいものもある。寢食も忘れ
全精神を打込んでやらねばならぬ仕事もあるし、又體質・精神力
等、人の性質によつて徹夜してもやり通せる、やり通すと云ふ
特殊な人もあるから一概に決めるわけに行かぬ。要するに目的に
即して最善の方法を案出實行すればよいのである。A君の如き、

目的に即した良い形式の實例であらふ。

此の實と形に付いて便宜上、以下三段に分けて説明して見やう。
一、實と形。今、假に目的、理想とする實體を實と呼び、此れを實現せんとする方法手段を形と呼んで見ると、實は主であり形は従である。そして形の方法手段は常に實に即し實に添ふてゐなければ役に立たぬ。實に即せぬ形式は一切無駄になつて仕舞ふことは、前の例の防空演習の如きがそれである。實に形が即して効果を挙げたのはA君の早起等の實行がそれである。

二、實の價值。更に此處に、その實の價值と云ふ重要な問題がある。如何に形が實に即し實に添ふてゐても、實そのものに價值が無かつたら折角の形も實も無意味に終つて仕舞ふ。例へばどんなに戦術教練が上手に出来て居やうとも、明治十年頃の戦術法では今日の戦には用をなさない。爆彈、焼夷彈の威力がすっかり變つて來たのに、十年も前の防空訓練では防ぐことは出来ない。總べてのことは此の實の價值を検討し見定めることが一番肝心なので、實の價值を迂闊に考へ、疎かにして形の實行ばかりに努力してゐると、一切が無駄になるばかりでなく、いろいろな弊害を生じ、却つて逆効果を出す結果を見る。則ち家を失ひ國を亡す大事の因をなすのである。例へば同じ忠節と云ふ實に依つて働いて、楠木軍に就けば忠臣義烈となり、足利軍につけば逆賊と言はれなければならぬ。又、今次の大戦争も其の通りで、形は同じやうに戦争はしてゐても、日本の戦争は東亞民族の獨立と云ふ目的にあり、米英の目的は東亞侵略擄取にある。其處に實の價值として天地雲泥の相違があるのである。而してこの實の價值は、古今

東西に不變の内面と、時・處・位に隨つて常に變つて行く外面とある。

三、實の不變と變化。一例によると、作物を作るには窒素・燐酸・加里の三要素が必要であるが、作物に依つて窒素を多く要するものもあり、加里を多く要するものもあつて一様では無い。又、同じ作物でも土地の旱澁・肥瘠の状態によつて施肥の方法を變へないとうまく出来ない。即ち實の變化である。實の不變と云ふのは、窒素・燐酸・加里は作物の肥料なり、作物にはこの三要素無かるべからずと云ふ原則である。佛教は印度に起り、三千年の歴史を経て現在日本にも傳はつて一大佛教國をなしてゐるが、此れを三千年過去の印度異國の宗教であるとか、今の時代の日本の國に用はない等と云ふ者は眞の佛教の價值を知らない輩で、まことに憐れな人達である。佛陀の教は宇宙の實相・眞理の根本から説き出されたものであるから、これが時代や國の相違に依つて價值を失ふ等のことは絶対に無いのである。それは宇宙法界の實相・眞理そのものが永久不變であるからである。生老病死の人生に苦樂滅道の教の力も最勝王經・仁王經・法華經等の國難對治の教も現在に脈々として生きてゐる。永久に人類世界に福利を齎らし濟度を與へるものなのである。この佛教の教にも不變の一面と變化の一面がある。それは宇宙の諸法實相と云つて、この法界自體に變化と不變の両面があるから、従つて教も二面を含んでゐるわけである。佛教の不變と變化の兩面に齟齬し、よくこれを活用し眞に教の力を發揮して、人を救ひ世を導き、幸福安全な生活を與へる。これ眞の大導師であり大法師であつて、當に國寶の大偉人

であらふ。日蓮聖人はよくこの大問題を解決せられた。未法萬年に吾々の依るべき眞の佛教を發揮せられた。そして我れ日本の柱とならん、我れ日本の大船とならん、我れ日本の眼目とならん、日蓮を倒すは日本國を倒すなり、日蓮によりて日本國の有無はあるべし、と叫ばれた。實に偉大なる確信であり、宣言である。國家存亡の今の秋、我慢偏執・名聞利義の一切を捨てて虚心坦懐、眞に正に歸し邪を捨て一日も早く國家安泰の樂土を願さなくてはならない。

日蓮聖人と法華經は誰も知つてゐることであるが、この法華經に依つて現れるものは、本門常住の三寶に對する信仰である。即ち本佛釋尊の久遠よりの常住不滅が信ぜられ、南無妙法蓮華經の題目を唱ふる時、本佛釋尊は其の人を救護し、感應を垂れ給ひ、諸々の罪障惡業は朝日の前の霜露の如く消滅する。心性よりは自然に善根功德を發し、隨時隨處に適應せる善根の華を咲かせ、功德の果を結ばしめる。諸天善神また此の人を護り、百由旬の内、諸の護患無からしめ、其の人の住所は金剛の如く、寂光淨土は未來に待つまでもない、現世現實に其の相を現して來る。我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の覺開、種々の寶を以て莊嚴し寶樹華果多くして衆生の遊樂する所なり、諸天鼓を擊ちて常に諸の伎樂をなし、曼陀羅華を雨らして佛及び大衆に散ず、と云ふ樂しむべき莊嚴の世界が實現されるのである。これに反し法華經不信謗法の人は、現世に白癩病を得、其の他諸の重惡病あつて地獄・餓鬼・畜生・傍羅の三惡道四惡趣を現世に感得し、内外に三災七難起て樂しむべき處は無い。

この法華經が弘つて利益のあるのは、佛滅後二千年以後、未法萬年の今の時代、處は大日本國、人は日本人である。時・處・位ともに吾等の信すべき經である。律宗の戒は釋尊當時の印度の國情・風俗を基本として定められたものであるから、時代も國も違ふた日本には適せない。それ等の戒は一應解散撤し、取るべきはとり捨つべきは捨てて差支へない。否、さうしなければ即ち律國賊・形式亡國となつて一大事の事態をひき起すのである。日蓮聖人が「彼の國により法なればとて、此の國にもよかるべしと思ふ可からず」と仰せられたのはこれである。獨り佛教ばかりでなく外來の宗教・思想等文化の一切は形ばかり眞似てはならない。

第一次大戦に敗れた獨逸は、敗戦國の苦しみを骨の髄まで味はされた。戦争には敗けるものではないと云ふことが國民の一人一人に充分徹底して來た。其處から立ち上つた獨逸一致團結の力は一人の指導者ヒトラーの腕に自在に活用され、今次大戦に恐しい力を現してゐる。此の獨逸の制度が良かったからと云つて、長い間自由享樂の中に育てられた戰勝國には成功しない。日本の大和魂が立派だから眞似をしやうと思つても、皇統連綿の御皇室の無い他國には眞似は出来ないのである。又、昔に良かったから現在にも復活して見やうと思つてもさうは行かぬ事がある。要は形式ばかり眞似してはならぬ。過去の歴史と四圍の状況を觀察して判斷を下し、最も適切・適應の實を發見創設して行かないと、實地に當つて色々な矛盾・無理を強ふる結果は善法精神に退歩を來たし、反感呪詛の發生蔓延となつて、恐しいものを内蔵するに

至るであらう。

私は第二國民兵で、昨年の夏三日間と今年二月と、二回に國土防衛の爲竹槍訓練を受けた。何百人かの同輩が熱心は熱心であつたが、其の操作が昨年の夏より一つも進歩してゐない。こんなことではいけないと思つた。一人一人の人が本當に時局の重大を認識したなら、昨年教へられたことは其の間獨修獨練、何程か進歩してゐなければならぬ。ヤツと突出す槍先がヘラヘラしてゐるやうでは、とても米鬼が突けさうにも思へない。せめて突くだけでも現役兵に敗けぬだけの稽古は出来てゐるやうでなくてはならぬと思ふ。國家危急の際、ただ制度や命令だけに頼つてゐるやうでは駄目である。自らが自覺發奮、最善最良の方法を案出し、體力の無い者は體力を練り、家族に病人があれば一家の健康法を考へ、國家の一大事を念頭から離さず、各々が其の職分に邁進すると云ふことではなければならぬ。所謂盛上る力と云ふものが其處に現れ、それ等相集つて家庭・各地方に適應した制度や命令が布かれて行かねばならぬ。各々の職にはそれぞれの専門知識と云ふものがあつて、素人、門外漢に分らぬ奥の奥と云ふものがある。それ等に對して徒らに干渉を加へたり壓迫を加へると、伸びるものも伸びないで、折角の盛上る力を抑へる場合がある。専門知識に對しては門外漢は即ち半利口なので事を誤る因である。賑々として盛上るそこには必ず分裂黨派と云ふものが現れるであらうが、これは熱意のある證據で仕方のない現象である。ただ争ひの爲の争ひ、爲にせんとする黨派争ひは、此の憐愛國心に訴へて慎むべきであるが、これを恐れて同合だ統一だと無意味の統同は大切な

熱意を冷却し根絶を來す。此の國家存亡の際、これこそより以上恐ろしいことである。熱のあるところ分裂し統同する處熱は失はれる。とは先哲の格言であるが、現在の狀勢を見るに、この感無きにも非ずである。

形式あるところ必ず實あり。實ある所又必ず形式は生れる。形式決して排除すべきでない。否、形式を捨てて世の中に何にも有りはしない。吾々が袈裟をかけ法衣を纏ひ經を讀み禮拜供養してゐるのも一つの形式であるが、この形式によつて實の信仰に入り實の信仰は發してこの形式に表れてゐる。人を敬ふ心發して禮儀作法の形と現はれ、作法より又人を敬ふ心を修養すると同じである。要するに吾々は最も價値ある實を掴んでこれを實現する方法の形式を取り、又、其の實から發する形を行はなければならぬ。實の問題こそ重要である。

今議會に於て姉崎正治氏は「日本は今、天譴に遇つてゐると思ふが如何」と言ふ間に對して、小磯首相は「然り、天佑と天譴は表裏の關係にある。日本は確かに天佑と云ふより天譴に遇つてゐる」と言明し「此れを脱するの道は行政と教育の改善にある」と答へられた。如何に農家が排水だ地肥だと言つても、一度旱魃に見舞はれば萬事お仕舞ひである。此の大決戦下に東海地區の大地震の如きあり得べからざること、これを天譴と云はずして何と云はん。天佑なんか信ぜられないとか、自然の現象だ、天然だ、人力の限りに非ず、など言ふ無神論者、或は人力の限りを盡せばそこに天佑あるのだ、とか言ふ漢たる考へ自體が、天譴を受けるやうになつてゐるのである。

日蓮聖人の一生涯の主張たる立正安國論はこれである。彼の萬祈を修せんよりは、この一因を禁せんにはしかず」との眞意は何處に在るか考へて見なければならぬ。汝早く信仰の寸心を改めて速かに實業の一善に歸せよ、然れば三界は皆佛國なり佛國を我れ我んや、十方は悉く寶土なり寶土何んぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壊なくんば身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん。云云。

この皇國未曾有の危機に際し、なほ日蓮聖人に誹謗を加へるが如き輩あらば亦何をか言はんやである。我等は何としても正しく勝たねばならぬ。然るに人智・人力には限りがある、天佑なくしてはこの大戦争は決して治まらぬ。如何にして天佑を受く可きかは、宗祖の御遺訓に昭々として明かである。この秋に際し吾々門下僧俗が從來の如き無道念・無節操・迷信化せる信行を以ては、

如何ともし難きである。須らく行學に精勵し眞の法華經・日蓮聖人の教の眞意を擲んで各々に於て先づ起たなければならぬ。末法無戒を口實に無節操、不徳漢に墮落せざるやう互に諷め合はなければならぬ。さうして第一義の信仰に於ては斷じて憍意誑法があつてはならない、經文祖書を眞解し私見を挿入するが如きは魔の眷族であらう。依法不依人・經卷相承・何處までも經文を基としなければならぬ。若しそれが如何なる理由にもあれ歪曲、淺解されることなれば天譴は其處から現れる。

前線の將兵は家を捨て命を抛て米鬼と取組んでゐる、比鳥の決戦は將に皇運を決するの段階に至つた。自他の宗旨如何を問はず世間の道に於ても出世間の信仰に於ても誤れるを匡し、正しくし追ひつめられたる現狀を眺ね返へさうではないか。

春季彼岸供養並祈願會勤修

日時 三月十九日(月曜)

朝六時三十分—八時

會場 本部長階上
行事 修法、座談

財團 統一團
法入 統一團

時局柄別ニ御案内狀差出シ難キコトモ有之宜敷御諒承御參詣相成度候

御注意

來ル四月一日ヨリ郵便料金ノ改正ニ伴ヒ本誌ノ送料モ一部金五錢ト相成申候就テハ從來半ケ年以上ハ送料ヲ當方負擔トセルモ今後ハ別ニ御加算相成度尤モ前金御拂込濟ノ方ハ次回御送金ノ時ヨリ改正御願申上候
猶振替便ニヨル場合ハ別ニ金十錢ノ手数料ヲ御添置キ被下度候

統一團會計

嗚呼！

日本の柱

法燈を掲げて起て！

居士 聖 軒

關東大震災の時だつた。そう云へばもう彼は廿年以上にもなつてしまつたが、あの天地晦冥グラ／＼と来た一瞬間、丁度僕は東京市の繁華街を歩いてゐた。物凄く大音響大動搖と共に人々はたゞ阿鼻叫喚、右往左往に陥つてしまつた。何しろ一切を託してゐる此大地が大震動と云ふ譯ぢやから、逃げるも隠れるもあつたものではない、僕は街路の片方に身を避け既目合掌、南無妙法蓮華經々々々々々々と唱題三昧一切を委したのであつた。

やゝ暫くして震動も納り騒ぎも大分靜かになつたので、ホツと我に歸へり目を開いて見る……と、何と驚くべし。何時の間に集つたか百數十人の人々が、我を取り巻いて皆々一心に合掌し唱題をしてゐるではないか。一瞬天地はそのまま大光明そのものになつてしまつた。餘りの靈感に感激感謝の涙が止めどもなく流れてるのをどうする事も出来ない。僕は思はず「衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿」と大聲で感謝の讃經を添げたのである。人々は此の大震災の恐怖も驚愕も一切を打ち忘れ只々唱題するばかりである。先程の顔色は何處へやら涙に宿る感謝の光と共に賑々たる一大生氣に浴し、澄明たる希望の光明は全身に溢れてゐるのだ。是だ！僕は思はず快心の叫を擧げざるを得ない。

嗚呼此の一本の柱、小なりと雖も此の題目の柱！

爾來二十有餘年は夢と過ぎたが、僕は此の體驗を深く魂に銘し、何時か、何かの御役に立つ事を確く期してゐたのであつた。恩師本多日生上人は常に「今に大國難疊々と襲來し國民其の擧措に迷ふ事あり、その時こそ、日蓮聖人の流れをくむ者は決然起つて日本の柱となるべし。世界の大本は其處から誕生する。如何なる艱苦あるとも恐るべからず、異體同心勇猛精進すべし」と仰しやつたが、僕は今こそ恩師の慈訓が舞々と胸にこたえるのだ。それと共に日蓮大聖人開目鈔の「我日本の柱とならん」の大誓願が鑿々天鼓と響いて居るのを感じざるを得ない。今や我が大日本帝國は開闢未曾有の大國難に當面してゐる。ソロモン血戰以來、多くの玉碎血戰の連続を経、遂にはレイテ、ミンドロ、ルソンの太平洋天王山の最大決戦に差し懸り、神風は若き神鷲の如く、敵軍の逆捲き肉彈猛攻、護國の華を咲かせつゝあるが、既に敵軍の米機は侵すところとなり臺灣、小笠原の攻防戦も正に敵軍勝負の土壇場に臨んでゐるのである。此の何處の一戦をも失はんか、それこそ絶體絶命の敗勢に陥るのである。國運は正に斷崖絶壁の深淵に臨み、一歩千仞の危機に直面してゐるのである。國民は只億兆一心、必死の旣を決してゐるのであるが、永き開英米主義に感染の結果中々妙智妙力が湧いて来ない。官民一致、一億一心、増産挺身と政府は頻りに號命を發し、既に學生も皆々部所に就いたのであるが、敵の大機動部隊が支那に押し寄せ、千數百の艦上機が、帝都上空を亂舞してゐる此の秋に、未だに不如意不圖滑なる狀況が各所各方面に渦巻いてゐるのである。國民は只々切齒扼腕

如何にすべきぞと天の一角を睨み、大神通力の爆發を祈つてゐるのみである。既に個人的依り處、地位も名譽も財産も一切當てにならぬものと痛感させられ、此の上は只國家と共に戦つて戦つて勝ち抜くのみであるとの覺悟は成熟しつゝあるのであるが、何分にも其の信念、其の信仰が、永らく物慾萬能思想の毒藥深く其の身に入り正しき宗教を蔑視し來りしため、腹の底から湧き起つて来ないのである。政治家も經濟人も技術家も科學者も今こそ國と共に生き國と共に倒れるのであるとは知りつゝも、もう一息！もう一つ……と其處に腹の底から無條件に湧き上る絶體の自信力、爆發力に不足を感じる懼みがあるのだ。此の如何にも斯うにも割り切れないもどかしさの現境打破が焦眉の急であり、必勝大道確保の根源であるのである。

恩師本多上人が國家存亡の秋、日蓮主義者の立つべきの時と、仰しやつたのは正に今だ。日蓮大上人が佛法の大義の紊亂即國家の不祥の根源なり、佛法の名分を正し大義を確立し以て國家の危急を救はんとて彼の有名な大誓願「我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん」と誓ひし願破るべからず」と絶叫し死身弘法、國民をして其の趨くべき所を示されたのは、眞に今の吾等が身讀すべき嚴訓である。

我々日蓮上人の教を奉ずる者は今こそ願起すべし。題目の金剛杖を眞向から振り翳し先づ心中の惡魔を退治し進んで米穀英鬼を擊滅すべきは眞に今である。法華經の信仰を頂戴し本佛の神通威力を背に負ふて我々は皆一本々々の國家の柱となるべし。工場に

戰場に事務所に街頭に、堂々題目の法燈を高く掲げ天地の正義と燃え盡くさねばならない。

大東亞樂土の建設、八紘一宇、世界人類の神靈的救済を使命とする日本帝國の大理想も大日本の勝利と共にのみ實現せられるのである。日本倒れては天地の正義もなく、宇宙の神も無い。日本を倒すは世界を倒す也。法華經守護の日本、本佛護念の大日本の眞價發揚は眞に今なり。大難は大善を生ずるとは聖人の金言だ。

日蓮主義を奉ずる者は皆一人一人、日本の柱として立ち上るのだ。此處に僕の震災體驗の大斷言がある！此の柱を中心に全戰場全研究所が「我此土安穩、天人常充滿」の即是道場と展開されるのだ。その唱題の響樂の中から大きな靈光が發する、神祕不思議な説明が生れる、兵器が飛び出す、勇猛心が湧出する、斯くて日本人の魂の眼は開かれ確信の光は天地に瀉り、惡魔は擊滅されるのである。斯くて天地の大使命を背負ふ大日本の國體は全世界に光揚されて来るのである。此の大斷言こそ確く我々が信受すべきであつて、唱題三昧佛祖の妙力を受け續いで願起する日蓮教徒の信條であるのである。

日蓮上人の教を學び、法燈の流れを汲む者の護法護國、祖國の榮光を荷負ふ報恩道は眼前に開けてゐる。法華經の大信力を以て國恩に報すべき大任務は今である。宜敷く如說修行の大願を起すべし。誣する所眞の敵は外には無い。汝が心魂の奥にこそ惡魔は住む、國民の大機偉大反省の題目を高らかに唱へ、我も人も共に俱に妙法力を發揮し必勝の大道を確立すべきである。合掌

本部 團報

を中心に居残つた十数名の懇談會に極めて満足感を與へられ、力強い覺悟の下に零時過教會した。

○本誌は此度六百號に達した、宗門誌としては實に稀有である。初め四箇格言問題から發端し、間もなく本多上人の統一團機關誌として過去五十年間、一貫して大法宣布の爲に孤軍健闘、不偏中正、堂々として素願達成に勇精を續けてゐる。職局の苛烈緊迫を告げるに臨み、人々は益々正しい宗教信仰に基いて正念不動以て最善を竭すべきである。それで

佛敎信仰の正徑を知らんと欲するもの、純正の日蓮主義を知らんと欲するもの、人生の眞意義を理解せんと欲するもの、此等は須らく本誌を讀むべきだと、本多上人は叫んで居られる。

○紀元の佳節は本部開館の記念日に相當する。周圍の状況に鑑み、「都民總躍起大會」を此の日十時から公開し、先づ國禱會並に陣病致の諸精靈追福の修法後、小西師の所感、田中日鐵外事課長の職局と信仰に關して意義深い講話あつて後、禱部常任の閉會の辭に一段落せるものゝ、引續いて田中氏

を救ふ事が出來ず、現に宗教の意志に反する戰爭が行はれて居るとすれば、宗教的人類愛の實現も結局別の考へ方をせねばならぬといふ事になる。……換言すれば人類乃至は民族自然の結合である國家といふもの道を実現せねばならぬといふ事に於て國家と人類とを二元に考へない我が神ながらの道の既成宗教を「超した高次性がある」といつて居るが、こ

れは未だ佛敎を理解せず、經典を讀まざる者であり、更に日蓮聖人の法國冥合といふ卓見にも觸れてゐない極めて淺識の戯論とも稱すべきものである。若し斯ういふ頭を指導層が持つならば、寒心すべき様相を呈することを憂へる。警戒すべきである。

統一統 一部會金 二十錢 送料二錢
半ヶ年 金一圓二十錢 送料共
一ヶ年 金二圓二十錢 送料共

昭和二十年二月二十五日 印刷納本
昭和二十年三月一日 發行

東京都小石川區音羽町六ノ十七

編輯兼 磯部 滿 事

發行人 磯部 滿 事

印刷人 山田 英 二

東京都小石川區音羽町八ノ十一

印刷所 新興印刷音羽工場

東京都神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版印刷統制株式會社

東京都小石川區音羽町六ノ十七

發行所 財團 統 團

電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番
會員番號二二五二二二號

統

一

明治三十年十二月二十四日 第三種郵便物認可
昭和二十年三月二十五日 毎号一圓二角五分
昭和二十年三月一日發行、毎月二日發行

第六百號